

学長挨拶

ー令和2年4月入学者の皆さんへー

令和2年4月に東京都立産業技術大学院大学に入学した学生の皆さん、入学おめでとうございます。教職員ともども皆さんの入学を心からお祝い申し上げます。またこれまで皆さんを支えてこられたご家族や関係者の皆さまに心よりお祝い申し上げます。

さて、今年の入学者の皆さんは新型コロナウイルスの感染の広がりの中、入学されました。この時代に生きる者にとって経験したことのない状況に皆さんも我々も直面しています。そして、本学では3月5日からAIIT新型コロナウイルス対策本部を立ち上げ、連日様々な対策を打ち出し実施しているところです。3月の学位授与式をはじめとする様々なイベントの中止や延期に加え、皆さんにとって大切な入学式も中止といたしました。また、授業開始を5月初旬に延期したところです。

これを取り巻く問題はこの新型コロナウイルスの影響が社会の広範囲におよび、かつ抜本的な対策がいまだみつからないことにあります。本日にも政府から緊急事態宣言が発せられ、今以上に我々の生活、社会活動のすべてに制約がかかる状況になります。本学としても皆さんの大学での学びを速やかに開始したいと考えておりますが、5月開始予定の授業を通常通り実施することも危ぶまれる状況になりました。

皆さんご存じの通り、本学では開学以来原則すべての講義をビデオで配信する仕組みを導入しています。ただ、通信教育ではございませんので、大学の学部教育とは異なる大学院の学びの質を維持しながらどのように遠隔教育を取り入れることで学習効果を低減させず授業を実施できるのか、いくつかの代替案を検証しています。そのような事態になりました場合は、速やかに皆様に我々の対応を発信し皆様のご協力もお願いすることになろうかと思いますが、通常通りの授業が実施できることを本学教職員一同切に願っています。

ここで、入学者の皆さんに東京都立産業技術大学院大学が考えている教育について少しお話ししたいと思います。

皆さんは入学前に本学のホームページをご覧になったと思います。そこで私が発信しているメッセージに次のような箇所があります。

「実社会で直面する技術課題は演習問題ではありません。一つの専門知識やスキルで解決できない課題がほとんどです。従来の大学院教育で実施されてきた体系的な知を獲得しているだけで解決できるほど現実の問題は単純ではありません。むしろ従来の知識だけでは、その本質を理解することすら困難な複雑性を有しています。それぞれが技術横断的な問題解決を必要とするのです。本学では、このような現実の問題を高いレベルで解決できる人材を育成するために豊富な事例を用いた授業や本格的なPBL型教育を導入することで、実践的な業務遂行能力を獲得できるようにしました。PBL型教育の原点は自らの力で原理原則に立ち戻り考えることと、高いコミュニケーション力を発揮してチームで強固な壁を突破することにあります。これらの力を本学では全学生が獲得すべきコンピテンシーとしています。すなわち、コミュニケーション能力、チーム活動、継続的学習と研究の能力の3つのメタコンピテンシーの獲得を

皆さんに求めています。」

ここで語りたかったことは、予め学んだ体系的知識だけでは本当の課題解決が困難な現実の問題が沢山あるということです。完成された知識などない、継続的に学習し研究する力が必要であるということです。

ここで皆さんに是非お読みいただきたい本がございます。それは J.S. ミルがイギリスのセントアンドルーズ大学の名誉学長に就任したときの講演録です。日本語訳では岩波文庫から「大学教育について (J.S. ミル (著), 竹内 一誠 (翻訳))」として出版されています。ミルはこの演説で『大学は職業教育の場ではありません。大学は、生計を得るためのある特定の手段に人々を適用させるのに必要な知識を教えることを目的とはしていないのです。』ときっぱり話しています。これから専門職大学院で学ぶ皆様に大学の目的が職業教育ではないということが書かれた本を推薦するとはどういうことかとおしかりを受けそうです。ミルは続けます、『人間は、弁護士、医師、商人、製造業者である以前に、何よりも人間なのです。』と、そして彼の講演はあらゆる高度な職業に携わる者が身に着けるべき本質的な教養の重要性を語ります。

専門職大学院とは実践的な教育をする大学院だと一般には理解されています。それは間違っていないかもしれません。しかし真に実践的であるためには知の体系を未来に向かって拡大していく能力が不可欠です。コンピテンシーのひとつである継続的学習と研究の能力の獲得を本学が皆さんに求めているのも、こういった理由からです。ミルの言葉は本学における学びにおいても意味のある言葉だと思います。

本学では2つの授業科目を必修としています。ひとつは PBL 型演習授業であり、もう一つは技術に関する倫理についての授業です。

日本でも諸外国でも企業の不祥事や航空機・鉄道・船舶の事故などが毎年のように発生しています。このような現状において、企業を取り巻くいろいろな問題が発生したとき、トップとしての判断、中間管理職としての判断、一般社員としての判断は、それぞれの立場によって異なります。一般に法的な視点での議論は法学にゆだねられます。しかし、すべての法を熟知して産業活動を実施することが困難な状況で最低限守るべき倫理基準を学ぶことで自ら法に抵触することなく業務活動が円滑に実施できるようになります。このメリットは大きいものです。本学の技術に関する倫理の授業では様々な事例を使った考える演習を実施し、皆さんがそれぞれの立場で判断力を培うことを支援しています。

さて、大学院レベルの社会人のリカレント教育を考えた場合、従来は企業で開発研究に取り組んでいた人たちが大学院で博士の学位を取得することを目指すものだと考えられてきました。しかし、皆が研究者として生きて行くわけではありません。むしろ 20 代までに学んだことで生涯を通じてエキスパートとして活躍することが難しい時代だからこそ学び直しが必要なのです。どの年齢層にとっても新しい知識やスキルを獲得することが生きがいのある生活を営む上で必要となり研究科を再編しました。皆さんは再編後の最初の入学生であります。

新しい研究科を検討しているときに、本学運営会議のメンバーから一つの考えが披露されました。それは、起業するにおいてハスラー、ハッカー、デザイナーの三役が経営陣に揃うと成功すると言われているということです。

ハスラーは収益性が高くビジネスになるかという視点を持ち、ハッカーは技術的に実現可能か、または技術の壁を超えるにはどうすればいいかという視点を持ち、デザイナーは人間を理解し、ユーザーからみて広い意味で魅力的であるかという視点を持つのです。

このことを本学に置き換えると、情報アーキテクチャコースがハッカー育成に対応し、創造技術コースがデザイナー育成、そしてハスラー育成については、新しい学位プログラムである事業設計工学コースが対応すると考えることができます。

これらの学びが相互に作用し、起業・創業・事業承継に結実していくことが期待されています。

多様な学生達と同じ立場でチーム活動する学習環境は本学ならではのものです。今日皆さんは22歳から70歳までの同窓生、友人を得ました。わくわくする学びの環境が整いました。

新入生の皆さん、どうぞ本学で学び、キャリアアップ、キャリアチェンジ、スタートアップする力を獲得してください。

令和二年四月七日
東京都立産業技術大学院大学
学長 川田誠一